

第 15 回 日本がん生殖医学会学術集会

大阪中央公会堂 2025.02.22-23

男性妊孕性温存セッション「思春期前男児・AYA 世代男性がん患者の妊孕性温存」

実臨床における妊孕性温存精子凍結の現状と課題

IVF なんばクリニック 門上大祐

グリセリンに凍結保護剤としての効果が認められ精子の凍結保存が可能となり、1964 年には凍結精子を使用した人工授精による初の妊娠例が報告された。以降、精子凍結技術が生殖医療において臨床上実用的な選択肢となり、精子凍結保存が不妊治療や将来の生殖能力を確保するための重要な技術として広がることとなる。一方、がん治療の分野では、医療技術の進歩により治療成績が向上すると共に、原疾患の治癒だけを目指すのではなく、生存者の QOL を視野に入れた治療計画が近年益々重視されている。抗がん剤治療や放射線療法による精腺毒性が明らかになって以降、特に患者が若い場合には治療後の妊孕能が QOL を左右する因子の 1 つとして認識されており、2006 年には米国臨床腫瘍学会（ASCO）から生殖年齢にある男性に悪性腫瘍の治療を行う際には治療前の精子凍結保存を強く推奨する勧告が出された。本邦に於いても 2017 年にガイドラインが制定され、2021 年 4 月から厚生労働省による小児・AYA 世代のがん患者等の妊孕性温存療法研究促進事業が開始し、一定の条件のもとで凍結時の費用の助成を受けられるようになり、この問題に対する社会的関心の広がりが示されている。

現在、医学的適応の精子凍結を行う国内登録施設は 152 施設に及んでおり、私が所属する医療法人三慧会に属する 3 施設も加入している。我々は 2004 年に医学的適応の妊孕性温存療法を開始して以降、現在までに妊孕性温存治療希望で来院した患者は 1311 人に至る。その中で男性は 627 人であり、カウンセリングのみの希望やその他の事情で精子凍結を希望されなかった患者が 21 人、精子凍結を試みた 606 人のうち、576 人が精子を確保し凍結を完了している。

本講演では、3 施設のデータを基に、実臨床における精子凍結の現状と課題について文献的考察も踏まえて述べていきたい。